

うれひある人のつむには春の野の名もなき草の
ふさはしきかな

かなしきはもつれし髪をときわびて小さき音た
て櫛折りしとき

蓮葉に宿れる露に櫛ぬらし我がかみごとくも夏は
うれしき

土筆つむ子らと語りて舟ひとつのりおくれたり
春のわたし場

去年の秋友と別れし野の川の渡場さびしひとり
來つれば

池邊 芳江

我が母の髪に似たりとかき撫でし祖母の忌日も
いくたびか來ぬ

本田よし江

我も弱き女なりけり黒髪はまだ長きかと手をや
りて見ぬ

あたたかき春の日うけて木々の芽ののびゆくを
見る朝のひと時

あたらしき麥藁帽子ちらちらと人群に見ゆ初夏
の街

何處かに人と異なる處をばもどめかすかに慰む
日あり

うすあまきそらまめの香のそことなくたたよへ
りあり初夏の路

千野てう

見よ生の喜ひ春のよろこびに色まさりゆく野邊
の若草

日はくれぬ家路いそげはしらしらと渡場の道に
花あまたさく

初夏の河原よもきの白露にぬるるもうれし久下
のわたし場

さくらさく春の入江の渡舟京に上るは誰かめづ
子そも

岡田いし

ものかげに白う匂へる小手まりのうすら悲しき
夕まぐれかな

ただ一寸ち櫛にかかりし黒かみを惜しとぞ思ふ
女なる身は

うたといふあたらしき世をわかためにひらきた
まひしあはれ師の君

田邊 馨

いたつきて心しつけき友とちをうらやましなど
思ふこの頃

たたもだしたたもだすこそうれしけれ花咲く春
ののどけき時も

つらき事心にひめて人の前にたたほほるみて立
ちてありしよ

花やかにほふ櫻のかげに立ちなき友思ふ夕さ
びしも

わかやかにもゆる草見てふと思ふ小さきものに
こもる命を

やはらかき春の若草ふむ心地われにあらなむた
た一日だに

中原いくの

あをやかに土より出でし草の芽をふと見出でた
る朝の嬉しさ

ふむもをしふまぬも心ものたらぬみどりにもゆ
る庭のわかくさ

洗ひ髪風にまかせて春の午後柳のまごに歌おも
ふかな

相馬 芳枝

病みて三月未だ附添に親しますわがわけ髪を梳
くが憎くて

いとやせし紅さし指にぬけおちし髪を巻きとき
もてあそぶ床

幸うすき人のたぐひに萌えいでし草の命をおも
ふはかなさ

やるせなく心悶ゆる折々は草の芽をさへ惜しげ
なくつむ

カーテンの隙をのぞける星ひとつふと見出でた
る夜半のよろこび

いと薄き玻璃の板もつ心地すと言ひては母の吾
か手とらすも

昔見し樂しき夢の國いづこ入るべき道をわれ失
ひぬ

漕かれないでて水の真中に遙なる陸の動搖を聞は
わびしや

古賀 松代

かりそめのいたつきいえてかみほとくあしたの
まどに鶯のなく
よひの雨にうらわか草の露ふくむ牧場のあさの
物のしづけさ
さらさらと櫛とほりよき洗ひかみむすぶ土曜の
午後のうれしさ

齋藤 たまを

春の雲うす紫の影なげて若草にほふ野のまひる
かな
よきほどにふくらみいでしひさし髪ゆあみせし
手にそとふれて見る
さらさらとポプラーの葉のなり出つる夕へわた
しを一人過ぎけり
月淡きわたしの小屋にはんのりと白くにほひて
ここめ花さく
初旅に出つる夕のなつかしき心おぶりに買ひし
林檎よ
春日山ふもとの野邊にさく花をほりあひもなく
旅の子はつむ

江藤 馨

をやみなく今日もまたふる五月雨に色こそうつ
れあちさぬの花
晴れし朝紅くかがやく富士の嶺をなかばみせた
るわが部屋の間ど
雨晴れて氣も動かさるこのあしたにされるもの
よわれをけがすな
しろき雲かろく浮べる初夏の空の下なる水色の
かさ
睡蓮の花のそよきのゆめに似てまひるの夏のも
ののしづけさ

富澤 美穂子

けふの日も事なきことし鶯は昨日と同じ枝に來
て鳴く
江の南靜かに暮れて一むらのかすみの中に鶯の
なく
折々に名しらぬ小さき鳥のきて流れよごます春
のささ川
春の水底の小石の一つ一つたからの如く光るめ
てたさ

朝なあさな梳る髪結ぶかみあさましきまでわれ
にたがはぬ
たらちねはかかれとてこそなでつらめはたちの
われの長きかみかな
この心なにしたとへむ日をあびて柳の堤若草を
つむ
幼き日うれひなき日につみなれしかのおもかげ
に似たる若草
やはらかく若葉そよきて初夏の川のわたし場靜
なるかな

鹽川 國

南天の赤き實などのこぼれしをさひしむ庭にう
くひすをきく
髪結うて友禪きせて歩ませて後姿を笑みて見る
母
いと細うふるや春雨渡しばのやなぎのかげにか
さひとつまつ
君がふく銀笛の音のやはらかう木々の緑にしむ
夕かな

文科一部三年 伊藤 梅子

いささかの風になやみてゆらめける柳めでたき
下京の町
手燭して君を送ればわが門の柳に淡しゆく春の
月
わつかなる地のくほみに涼しくもささら波たつ
雨のあとかな
しき石はいささかぬれて青白き灯なかるる初夏
の町
しかくし雨のはれたる草原に白く走れる初夏
の花
たわくしと柳の枝をゆるかせて紺蛇の目ゆくさ
みたれの町
散る花のよするみきはに人形のかほも洗ひしわ
れなりしかな
さみたれの雨にこもりて人形のきぬぬひたりし
昔こひしも
去年さしし庭の小柳いきくどめくむにきさす
春のうれしさ

戸島 恭

わか心もどめ居し日にあへることそそろうれし
や雨はれし朝
叔母君のかたみてふ名をなつかしみ七年はかり
もちしこのかさ
白き花さきつつきたる園のはてに一つうこける
水色のかさ

齋藤加津

何事のわか前の世にありし日かあやしきまでに
胸さわきする
若き日の母のおもかけふとむねにうかびくる夜
のなつかしさかな
今少しつよき心をなご母はあたへでおほしたて
給ひけん
山櫻今さかりなる君が戸をほとくたたく春の
よひかな
くもる日の春の大川黄によとみしろき鳥のみ目
にしるきかな
バラソルの白と袂の紫と目にあかるしや初夏の
人

春來ればこのさびしさの薄らかむかくおもひて
は日をすぐしつる
思ふことえいはぬものに生れきしわれの生命は
さひしかりけり
多くいひおほくさひしくなりにけり何すればよ
きわが心をも
友はみな安きねむりに入りにけり夜はわれにの
みつらきなるらむ
かくありと夜毎のわれをか友のゆめに知らせ
ん神もあれかし
塵などを捨つらんやうにわけもなく女々といひ
すてたまふ
新かさをえしてふほとこのいささかのよろこびに
居て今日は安かり
新かさをさしてありてふ少女子のごときよろこ
ひもてるあはれさ
おもふこと足りしやうなる安けさのみちたる雨
のあとのあけほの

雨はれぬ名なし草さへ生きかひのありといふこ
とかゝやきてあり
しらみゆくあかつき頃のカーテンのすき間にみ
ゆるのきの青柳
春雨にしづかにぬるるいとやなぎそのごと安き
一日もかな
紫に空うちかすむ春の朝笥の水の音やはらかき
雨はれて入江の波にふたつみついさり火見ゆる
春の霽かな
春雨にせとの小川の水ましてさゝれにうつる山
吹のはな
今朝見れば夕の雨にちりぬらし汀によする花の
しらなみ
花うかぶ小川の岸の青柳に春の雨ふる夕まくれ
かな
土手ひとつへだてゝ見ゆる川やなぎ夕さりくれ
ばふかみどりなる

小野あつ

山田嘉都恵

素給によさかさとして初夏の町ゆく事をほこら
ひにする
塵たゝぬ都の朝の雨あがり電車の行くもなつか
しきかな
何といふ事もあらぬに出でて見る雨はれし日の
軽き心よ
傘さして外に出でよと雨の日もわか背に来る姪
なりしかな
さびしさを好む身にして疾めばたゞ人の來ます
がうれしかりけり
待ちまちて來まさぬものと知りし時心かへりて
静まりにけり
病むことの多きこの身をいとせめてみせまつら
ぬをよろこびにする
くちずさむほどの歌なきひとことがこの夕暮の
さびしさをます
何ゆゑにかかる事してあるらむとみづからをさ
へあざけりしかな
思ふ事つよく云ひ得ぬ性なれば女てふ名ぞわれ
にかなへる

あさましくやうなき事を多くいふうかれ心地の
つゞくこの頃
いたづらにいはいざりしをば一日のよきことにし
てゆめに入るかな

關 みさを

いさゝかのたゆさのこして雨やみし夕はうれし
夕は悲し
何の木かまるき若葉のちらちらと光る朝の雨上
りかな
心ふとほの明るみのさし來り眼をあげて見る雨
後の大空
きせかくるかさの小ささしつとりと捨のぬる
春の夕暮
なつかしき心の如くにはやかにやなぎの芽こそ
もえいでにけり
やはらかき疲れに入りて春の夜の薄き月まつ門
のやなぎよ

文科一部二年 武川 正代

うらさびし喪にある國の春の野は静かにくろく
たそかれてゆく

夕やみに藤白うさけり子もなくてしづやかにす
む姉君の家
山ゆけば鶯なけり鎌倉の初夏の日そしつけかり
ける

萩野 よしの

みどりなる山見をる時ほどとぎす名のを聞く
は嬉しはかなし
緋だすきの村の乙女が早苗とるうしろの山の初
夏のいろ

倉田 松代

とある午後ふとなかめやる裏山にそよきて來た
の初夏の風

阿部 とき

花つみて麥苗ふきてゆきし野をふと思ひ出づる
旅の夕ぐれ
惜しけれど只とく散れよ藤の花なれ實のらずは
我かへられじ

齋藤 禮

よき風の吹く日小鳥のついはむに似て藤拾ふ稚
兒の可愛ゆさ

雨の汽車目にいる伊豆の山々は青くけむれり初
夏の木々
初夏や白旗山の若みどり旅の心にやはらかくし
む

横井 まきの

やはらかき昔の母の胸に似て伏して泣きたき春
の野の草
いで湯わく若葉の山に旅ねして月あかき夜にき
く時鳥

川上 静江

藤の花そよ吹く風にゆれてありとすれば涙落つ
る夕を
初夏の日の事なさに倦んじたる心に仰く山の太
きさ

中村 嘉津

七曲りまかり終ふればあせばめる肌をふくなり
初夏の風
さや／＼と風にそける藤だなの下にたたすみ夜
の町みる

中島 ひさ

一步また一步のほりてはるかなる海見る山の初
夏の風
停車場に汽車は静に入りて來ぬ人の群れさへな
つかしき旅

砂山のよもぎにまじり露もちて豌豆の花さくが
うれしも

國語漢文選科二年 中山 八千代

春の野や幸といふ幸みな我にあつまれと摘む四
つ葉クローバ

このままに置きても見たくいたつらに取りても
見たき露の曇かな

旅の朝思はぬ方に日の出で、思はぬ方に波の音
する

午下り青き太陽うけてくちなはの這ふかうれし
き初夏の山

鈴木 美與喜

さみだれの晴間に庭をさまよへば、ぼと／＼玉
をおける姫百合